?+Life+? ~ ライフ ~

+ \$シロ\$ +

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

? + L i f e + ? ~ ライフ ~

【Nコード】

N O 2 1 6 V

【作者名】

+ \$ シロ \$ +

【あらすじ】

幼い頃から親を無くし、不幸の運命を背負って生きてきた不幸の孤児、遥瞳爽（高校2年生）は絶望する。自分の不幸すぎる運命に爽はもう生きていく意味も見つからなくなり、“死”を考えていた。だがそんなある日、爽は一つの錆びて刀身の折れた刀の柄を見つけ、人生は一転する……。。

壱ノ話『不幸』

“世界なんて…壊れちまえ” そう思っていた。

この不幸せな世界にうんざりだった。

遥瞳よっとう 爽そう（高校2年生）は今まで

“不幸”の中に生まれ

“不幸”の中に育ち

“不幸”の中に生きてきた。

それは小さい頃から不幸だった爽にとって普通の事だと思っていた。

親が居ないのも普通だと思っていた。

だから爽はいつもニコニコ笑っていた。どれだけ不幸でも、爽は笑い続けた。

“不幸”を普通と信じて。

爽は本当に小さい頃は普通の子供だった。親もいるし、友達も沢山いる、普通の子だった。

優しい両親で、毎日楽しいかぎりだった。爽は幸せだった。

だが爽を不幸に突き落としたのはある日の事だった。

爽が5才の頃、母と父が死んだのだ。
家のガスコンロが爆発し、火事で焼け死んだ。

爽には小学生の兄がいた。

爽は兄と一緒に外で遊んでいて助かったのだ。

それで助かった……と、言えるだろうか？

生き残ったのは両親を無くした小学生と小さな子供。

この二人で何ができるだろうか？

その後、爽は親戚の家にあずけられたが、なかなか親戚の家に馴染めず、

小学生になった爽はよく家出をしていた。

家出と言っても、小学生レベルなもので、親戚の家に近い裏山の秘密基地に隠れるとかそんなものだ。

ある日の昼前、いつもと同じ様に、爽は家出をした。

だが、その日は何か違った。爽の周りを包む雰囲気がなんとなく嫌な雰囲気だった。

こんな雰囲気は前にも感じた事がある。

そうだ。あの時だ。父と母が死んだ日だ。

あの日もこんな嫌な雰囲気だった。

だがしばらくするとその雰囲気は消え、なんとも無くなった。

爽は別にどうってことないだろうと、いつもの用に裏山へ走っていった。

爽は秘密基地で持ってきたスケッチブックに絵を書いて遊んでいた。

爽にとって絵を書くことはすごく夢中になるらしく、気づけば夜になっっていた。

すると爽はいつも夜7時ぐらいになると裏山に爽を探しに来て、叱りに来る親戚のおじさんを探した。

だが今日は探しに来なかった。どれだけ待っても。

8時になった。まだ来ない。

9時になった。まだ来る気配も無い。

さすがに爽も、これだけ家出してるから呆れられたのかなと思い、家に帰ってみることにした。

家についた爽は、シンと静まる家に違和感を感じた。

いつもならこの時間は親戚のおじさんがリビングでビールを飲みながらテレビを見ているはずだ。

なのにリビングには電気はついておらず、家のドアも開けっ放しだった。

それを見ると爽は少し寒気がした。

実に不気味だ。小学生の爽にとって、それはただの恐怖だった。

恐る恐る家に入ると、爽はリビングに向かった。

だが爽はリビングへ行く途中の廊下でその足をピタリと止めた。

なぜなら、リビングへ入る扉の隙間から、赤い液体が流れ出てきていたからだ。

爽は靴下を脱いで裸足になり、リビングの扉を開けた。自分の足の

裏を真っ赤にしながら。

リビングに入った爽は背筋を舐められるような感覚に陥った。

なんと親戚全員が腹部をナイフで刺されて死んでいたのだ。全員、リビングで。

おそらくこの間ニュースでやっていた強盗が入って、抵抗でもしたのだろう。

爽は足が震えその場を逃げ出し、家を裸足のまま飛び出した。

その時、爽は小学2年生だった。

その後、泣きじゃくりながら走っていたところを施設に保護された。爽は最初、ここは安息の地だ。とも思ったが、それは間違いだった。爽が施設に来て3年後。爽の周りがまたあの嫌な雰囲気になった。

その日の夕方。

児童が外で拾い、遊んでいたライターの花火が施設に燃え移り、施設が全焼した。

その事件で児童のほとんどが焼け死んだが、爽は全くの無傷だった。

その事件後、こんな噂が流れ出した。

「あの子は不幸の孤児。呪われている。関わると殺される。きっと死神だ。」

その噂で、爽の周りには誰も居なくなった。

それから爽は1人、裏山で見つけた空き小屋で生活することにした。

小学生が一人、山奥で生活。

簡単なものではなかった。

小学生にして万引きもした。生きるために。

そうして6年の年月が過ぎた。

人と話す事も無かった爽は、生きている意味も分からなくなっていた。

何も爽を支えるものはなかった。

もう、死んでしまおうか。…そう思った時だった。

ガサツ

何か小屋の外の茂みで音がした。

ここは人なんていない山奥。

疑問に思い、爽は外に出てみた。

辺りを見回すと、小屋の前の草むらに古く、ホコリまみれのものを見つけた。

爽はそれを手に取るとほこりを手で払いのけた。

『げぼつ・・・げぼつ・・・』

相当古い物のようだった。

『…刀の…柄？』

それは刀身の折れた刀の柄だった。

気づくと、爽はその刀の柄を小屋に持って帰っていた。

『…あ…れ？俺…何で持って帰って…。』

（これ…人のだったらどうすんだよ…。）

そう思いながらも爽は、刀の柄をボロ布に包んで、小屋の奥に置いた。

この柄が誰の物なのか知らないが、刀身が無いのは気にかかる。近くに落ちているかもしれない。

爽はその日、小屋の辺りを朝から夜遅くまで探したが、刀身は見つからなかった。

『…なんで柄だけ…。』

考えていた時、少女の悲鳴が聞こえた。近くだった。

普通、夜遅くにこんな山奥で少女の声が聞こえるか？

爽はいよいよ自分がヤバい精神状態なんだと思い始めた。

『アレ…？幻聴…じゃない…？』

爽は小屋を飛び出した。幻聴では無く、確かに少女の悲鳴だったからだ。

それくらい爽にも分かる。さすがに高校生だ。高校には行ってないが。

…数分走っただろうか。やっと少女を見つけた爽は凍りついた。

爽の目の前には血まみれの少女と、この世のものとは思えない、体中から骨が突き出した、人型の悪魔とも言えるような生き物が居た。

確かに生きている。おぞましい姿をして、皮膚もドロドロに溶けているが、確かに生きている。

だが、よく見るとその骨も人間の骨格にも見えた。

『人…じゃないよな…。』

と、呆然としていると、

「…たっ…助けにきてくれたの？」

と震えた声で少女が言った。

『何だよ…コイツ…。』

爽は血まみれの少女と一緒に、ただ震えていた。

「何してるの？お兄ちゃん！？一緒に逃げようよ！！」

少女は爽の手を取り、走り出した。

《ゾリッ》

『……………？』

走り出してすぐ、嫌な音が隣で響く。

その少し後にさっきの少女の首が爽の足元に転がってきた。

『うつ……………うあああ！？』

爽は首を見つめ、その場に倒れるように腰を落とした。

さっきまで動いていた、温かい少女の手は、もう冷たくなっていた。

俺も殺される

そんな事をふと思った。

『助け……………！』

恐怖で声も出なかった。

今まで孤独を貫いてきた爽でも、一人、誰にもみとられずに死ぬのは寂しかった。

爽は必死に足掻き、逃げようとしたが、頭を掴まれ、腕から突き出

た鋭利な刃のようなものを首に突きつけられた。

爽の首筋から、真つ赤な液が流れる。

『お前ツ…何なんだよ…ッ!』

爽が怒鳴る。

「キイヤアアアアアア!」

その生き物は耳にキーンと響く高音の鳴き声で吠えた。

『んだよ…コイツ…通じねえのかよ…。なら、早く殺ってくれ。…俺は…この世界に居ちゃいけねえ人間だから。俺が皆を不幸にするから…な。』

「キュアアアアアア!」

生き物が吠え、刃が深く食い込む。

>ブチッ…ブチッ…ブシュッ<

首から前が見えなくなるほど血が吹き出し、爽の意識は飛びかけていた。

爽は草むらに投げられ、倒れた。

体が冷たくなっていく。

もう手は動かない。

何だか眠たくなってきた。

（死にたかった…それが俺の望んでた結末…？…違う。嫌だ。死にたくない…！）

“ 生きたい ” 爽は生まれて初めてそう思った。

『 生き…たい……。 ……？ 』

すると目の前がキラッと光ったと思うと、爽は優しい桜色の光に包まれ、そっと目を閉じた。

冷たくなった爽の体のは桜の花が乗っていた

式ノ話『非日常的1日』

『……………。』

眩しい朝日が地面に横たわる爽を目覚めさせた。

朝だ。いつもと何ら変わらない朝だ。

ただいつもと少し違うのは爽が小屋から遠く離れた、草むらで眠っていた事。

『アレ…？何で俺こんなところに寝て……………』

爽には理解できなかった。小屋からここへは数100メートル離れている。

寝ている間、どうやって此処へ来たのだろうか？

それとも誰かに運ばれたのだろうか？

いや、まさか寝ながら此処へ歩いてきたのでは…？

色々考えたが、どれも無茶なものばかり。そんな理屈が通るはずもなかった。

そう。爽には昨日一日の記憶が失くなっていたのだ。

あの、おぞましい、恐怖の記憶を。

しかも、爽は死んだはずだ。首を引き裂かれて。

なのに何故爽は生きているのだろうか。

血なんてどこにもない。爽の服にもついてないし、草むらにも何も無い。あるのは桜の花びら数枚だけだった。

爽が重い腰を上げて、小屋に帰ろうとしたその時だった。すこし向こうの茂みに白い影が見えた。

『…白？』

それは、白づくめの服、いや、白いコートを羽織った人に見えた。

(今、俺を見てたのか…?)

しかしすぐに爽はこんな山奥に人なんてくるはずもない。

爽は見間違いと思って、目を少し擦ると、小屋へ向かい歩きだした。

数分後、小屋に着いた爽は少し違和感を感じた。

小屋に在るはずの無い物が小屋の中に在ったからだ。

それは、ボロ布に包まれた刀の柄だった。

そう、昨日の記憶を失くしている爽にとって、それはただの違和感でしかなかった。

『こんなもん…小屋にあったっけな…?』

そう言っつて、刀の柄に手を触れたときだった。

『…!?!?』

刀の折れた刀身の部分から桜の花吹雪が舞い、小屋中に散ったと思うと、その花びらが刀の刀身の折れた部分に戻っていき、その桜は刀の刀身へと変わった。そして最後の花びらが戻った時、刀の隣に薄紫の綺麗な刀の鞘が現れた。

『嘘…だろ…？何だよコレ…マジックかよ…？』

何故だろうか。

爽は何故かその刀に懐かしさを感じた。

そんな刀に見とれている時だった。

〔ドンッ〕

と、大きな物音がした。

小屋の外だ。人がその側の壁をわざと手で叩いたような音だった。まるで爽を気付かせる為のような。

爽は刀を持ったまま小屋を出た。

すると小屋の前には、白づくめのコートを羽織った女が立っていた。顔は深く帽子を被っていて分からなかったが、性別は胸の膨らみで分かった。

『…わっきの…！…！』

爽が驚きながら言っていると、白づくめ女が急にこう言った。

「おめでとつ。キミは301人目のライフ・メーカーだ。」

『…………はあ？』

何を言っているのか分からなかった。

急に目の前に現れ、謎の言葉を放った女に対して、爽は不安感を抱いた。

だが女はすぐに、続けてこう言った。

「迎えにきたんだ。さあ行こう。私と共に。」

言うと、女は爽に右手を差し出した。

『行くって…どこへ…？』

「決まっているだろう。キミは死んだんだ。死んだら行く場所は分かっているだろう？」

『…俺が…死んだ？…何馬鹿な事言ってるんだよ！もし俺が死んでたとして、俺を天国にでも連れて行く気か？？』

「いや、違うな。天国じゃない。地獄さ。」

女がそう言った途端、爽の周りの小屋や森の風景は一瞬で消え去り、かわりに何も見えなく、ただ暗い闇だけが残った。

『……………！…？』

一瞬の出来事で何が起きたのか、爽には全く分からなかった。

暗闇で何も見えなくなった爽は恐怖と不安感で座り込んでしまった。

『なっ…なんなんだよ…コレ…ッ！…！』

今日はこんな事ばかりだ。

全然知らない所で寝ていたし、

よく分からない刀は置いてあるし、

変な女によく分からない所に連れてこられるし。

そんな事を一人、考えていると。

『どうだ？闇には慣れたか？』

さっきの女の声がした。

暗闇で何処に居るのは分からないが、近くに居るといふことはわかった。

『聞こって……？』

爽が聞くと、女はフツと笑ってから、

「よつこそ…地獄へ。」

と一言言った。

参ノ話『地獄』

『此処が…地…獄？』

そんなものが本当にあるなんて信じられる訳も無かった。

「勿論。キミは死んだんだから。それにキミは人に不幸を与えた。地獄へ来るのは当たり前だろう。」

『…ほんとに俺…死んだのか…。』

爽はもう信じるしか無かった。ここまで全てマジックだとか、幻だとか考えていたけれど、もうこれ以上、自分も騙すことは出来ないと思ったからだ。

『…なあ…一つ聞いてもいいか？』

「ああ。何でも聞いてやる。どうせこれからは私は、爽、お前と一緒に生活するのだからな。」

『……………は？』

爽は耳を疑った。

たった今、自分が死んで、地獄にいるってことを知らされたばかりなのに、

その地獄で顔も分からない見ず知らずの女と一緒に暮らすなんて話、耳にも入れたくもない。

「聞こえなかったのか？お前と私はこれから、同じ家で暮らす。と、いうことだ。分かったな。」

『…何で…お前と一緒に生活しねーといけねえんだよ??しかも地獄で!』

「それは、私がお前の専属の調教師だからだ。」

『調教師…って…………。』

(待て待て待て…落ち着け俺。調教ってアレか？SM的な意味か！?)

「…違う!…たく…高校生というものはそんな事ばかり考えるから…………。」

『べっ…別に変な事考えて…ッ!!……………って…アレ?』

(俺、今、口に出してなかったのに…………)

「どうした？心を読む事ぐらい、そんなに驚く事ではないだろう?」

『…心を…読む…って、そっ…そんな事、本当にできんのか!?』

「ああ。容易い事だ。…お前もいずれできるようになるさ。私の調教を受ければな。」

…もう何か次元が違うような気がしてきていた。

今まで住んでいた世界とは何か違う、何か不思議なものを感じる。

この世界で、自分はこれからどうなってしまうのだろうか…。

そんな不安感と共に爽は少しワクワクしていた。

『なあ…調教って…どんな事すんだよ？』

「まあ調教師って言うてもただの教師ぐらいに見てもいい。肩書きがそうなだけで、そこまで酷い事はしないからな。だから調教というまでの事はしない。」

『は…はあ…』

「まあ主体となる事はお前を一人前のライフ・メーカーにすることだ。お前はまだ目覚めたばかりで、ライフをコントロールできていないだろうからな。」

『…そう、それが聞いたかったんだよ！ライフ・メーカー？って何なんだ？』

「そうか、説明がまだだったな。まあ、説明はしにくいんだが…爽、お前は死ぬ前、酷く絶望していたはずだ。」

『死ぬ前っつーか、死んだ事自体わかんねーけど…死にたいとは思ったかな…』

「そうか…記憶が消えているのか…。まあ…それもよくある事だ。初めてライフが発動したショックで記憶を無くしたり、意識が飛んだりすることは。」

『…まあ俺にとって記憶なんてどーでもいいや。だからそのライフって奴、何なのか教えてくれよ。』

「ああすまない。話がずれてしまったな。…そうだな…ライフは…
簡単に言えばお前のその刀だ。」

『…刀？』

爽は、小屋を出た時からずっと握っていた刀を見つめた。

「ライフは、生まれつきライフ・メーカーの素質がある者が生と死の狭間に陥った時、発動する…いや、現れる。その者の命を転生する…そう、ライフ・メーカーに転身させる為に…ライフというのは武器の用な物で、だがそれでいて、人は傷つけられない。」

『刀なのに…人が切れないのか？』

「そう。元々ライフは人を殺す為に出来ていないからな。…私のライフもそう。人は殺せない。」

『じゃあ何の為に武器の形してんだよ？意味ねーじゃん！』

「ライフ・メーカーとは悪魔払い師のようなもので、その武器で悪魔を殺し、滅する為に居るからだ。いわばライフ・メーカーは悪魔専門の殺し屋のようなものだ。だからお前の刀は人は切れず、悪魔しか切れない。そしてライフは、ライフ・メーカーが使うその武器、能力の事を言うんだ。…これで大体の説明は終わったが？まだ何かあるか？…質問なら何でも受けてやる。」

『何か…長くてわかりずれーけど…何となくは分かった！…これから俺は、この武器で、ライフ・メーカーとして悪魔を殺せばいいんだろ？…でも、悪魔何てほんとにいいのかよ？？』

「ああ。いる。悪魔も天使も、神さえも…。お前を殺したのも悪魔だからな。」

『俺ッ！悪魔に殺されたのか！？』

「…それも覚えてないらしいな。どうやら。」

『そっ…そんな悪魔とか普通に居るもんなのかよ？そのへんとかに。』

「ああいるさ。だがそれが見えるのはライフ・メーカーの素質がある者だけだ。」

『…あつ、じゃあ、ライフ・メーカーは何の為に悪魔を殺すんだ？つてゆうか何で俺、悪魔に殺されたんだ？』

「悪魔は…神が生み出している。悪魔は食事の為に人を襲い、殺し、喰う。それを阻止する為に私達が悪魔を殺す。だが、いつかは神を殺さないと悪魔は根絶やしにできない。だから悪魔を殺し、最終的には神を殺す。それが私達の役目…そういうことだ。」

『分かった…けど…神が生み出すって…天使とかじゃねえの？…しかもそれじゃ、神様が悪者みたいじゃねーか？神様っていい人じゃねーのかよ？？』

「悪者…みたい…か。」

女は、少し間があつてからそう呟いた。

『?』

「まあい。話は後だ。先に1人目のライフ・メーカー、地獄の王に挨拶に行くぞ。もう目も慣れてきた頃だろうからな。」

『王がいるのか?...それじゃあまるで国だな。』

「ああ...此処は地獄でもあり、国でもある。我々、ライフ・メーカーのな。」

『でも、俺含めて301人しかいねーんだろ??国って言えるのか?それ。』

「王が言うには、昔、1万人ほどのライフ・メーカーがいたそうだが...神との戦争が起こり、残ったのは王だけらしい。その頃は栄えていた国も、今では地獄だ。」

『.....。』

「まあい。王に挨拶に行く前に、私の自己紹介でもしておこうか。」

そう言うと、女は深く被っていた帽子をゆっくり外した。

黒髪の、綺麗なロングヘアだった。肩までかかった髪をなびかせ、女はこう続けた。

「私の名前は11人目のライフ・メーカー、エシ。いかにも死人らしい名だろう?...性別は見てのとおり女だ。...女らしい話し方では無いがな。それは自分でも分かっている。...が、今日からお前は私

と一緒に暮らすのだ。大目に見てくれ。これからよろしくな、爽。」

『よっ…よろしく…』

爽は、何で自分の名前を知ってたとか…、

急に一緒に住むとか勝手に決めんなとか…、

天使とか悪魔とか神とか…正直一体コイツ何言ってるんだろうって思っ
てましただとか。

…絶対に言えなかった。

けれど、爽は心のどこかで昔、その話を聞いたことがあるような気がしていた。

そして爽とエシは暗闇の中を歩きだした。

肆ノ話『王』

爽達がうつすらと道が見える闇の中を数十分歩いた時だった。

数メートル先に、提灯のような灯火がちらほらと見え始めた。

『明…るい…。』

長い間、暗闇を見続けてきた爽にとって、その小さな灯りは太陽にも見えた。

「着いたぞ…此処が、地獄の王、璃庵リアン様の城だ。」

エシが言うと同時に、提灯の灯りが大きく広がり、その灯りで目の前にひとつの和風の大きな城が浮かび上がった。

『しゃち…ほこ…だと…?』

「どこを見ている？入るぞ。爽。」

『おっ…おっ…!』

エシが城を見上げると、城と大きな扉がギシギシと音を立てながらゆっくりと開いた。

中に入ると、さっきまでとても闇の中にいたとは思えない、明るい

空間がひろがっていた。

そしてその空間の中央にある、7〜8人なら並んで上れるであろう大きな階段を数百段も上った時だった。

「おい…爽、決して璃庵様には無礼の無いようにな。」

『……………？』

だが、爽にはまだその言葉の意味は分からなかった。

そして数分後階段を上り終え、爽達は天守閣の部屋へたどり着いた。すると、着いてすぐに

「璃庵様、301人目のライフ・メーカーを連れてきました。」

と、エシが跪いて言った。

そしてその少し後に、爽もぎこちないそぶりを見せながら跪いた。

「…ご苦労だったな、エシ。」

遠く、暗くて見えづらい部屋の奥から璃庵と思われる男の声がした。

「…はっ。」

と、一言言つと、エシは立ち上がり、一度礼をすると、部屋を出て

行った。

エシが出て行くと、男は暗い部屋の奥からゆっくり爽の方に歩み寄りながら言った。

「爽…俺が地獄の王、璃庵だ。…よろしくな。」

そう言っつて男は跪く爽の目の前に手を伸ばした。

それを聞いた爽が璃庵を見上げた時、爽は驚愕した。

『…ガ…ガキ…ツ…!?!』

どうみても爽の目の前に立っていたのは、小さめの白いコートを羽織った、幼稚園児ぐらいの幼児だった。

「ガ…キ…だと…?!?!?てめえ…。」

『…あつ…!』

（ “ 爽、決して璃庵様には無礼の無いようにな。” ）

この瞬間爽は、あの時の言葉を思い出し、それと同時にその言葉の意味を知った。

『あつ…あのつ…!すいません…。』

「お前…何歳だ…?」

『えっ…?ああ…17…歳…です…。』

「なんだ、やっぱりお前の方がガキじゃあねえか。俺はこの世界で500年生きている。そして死んだ歳が5歳。つまり、俺は505歳だ。」

『ごひやつ……ええっ!?!』

「ふん、…驚くのも無理ないか…。…どーゆう訳か、この世界では、死んだ時から歳はとらないし、成長もしないみたいなんだ。だから俺はここで500年も生きてる。…なんせ王だからな。」

『でも…500年前の人にしては、話し方は少し今風なんだな。』

「うっ…うっせえ!…そっ…そりゃあ最新を取り入れねえとよ…?…って…何どさくさに紛れてタメ口使ってたあ?ああん?」

『あっ…すいません…。』

「…まあともかくだ、爽、お前のライフを見せてくれないか?」

『どっ…どっぞ…?』

爽はずっと右手に握り締めていた刀を璃庵に渡した。

「…うん。いい刀だな。」

璃庵は、刀を色々な角度から見つめた後、爽にそっと刀を渡してこ
う言った。

「いいか爽、ライフってゆうのはな、その名の通り、命、生命なんだ。この武器、ライフは生きている。…だがライフは自分の命を糧にして発動しているんだ。…この意味が分かるな？…そう、ライフが壊されれば自分の命が無くなるのと同じで、使用者は死んでしまふんだ。いわばライフはもう一つの自分の命の様な物だ。…ライフと、自分の命は繋がっている。…それを覚えておいて欲しい。」

『この刀が…俺の命…。』

「ああ、そうだ。まあ正確に言えば、ライフが破壊されれば、死ぬというよりかは“完全に消滅する”と、言った方が正しいな。…ただでさえ一度死んでいるんだ。俺達ライフ・メーカーがもう一度死ねば、消滅の道しかない。…だからその刀、お前のライフは、命と同じように、大事に扱う事だ。」

『…わ…わかった…。…でも、それだけか？…あんたはそれだけを言う為に俺と会ったのか？…他の、ライフ・メーカーにも、これだけの事を言う為だけに会ったのかよ？』

「…いや、もう一つ、言わなければならない事がある。」

『…それって？』

「…それは、お前のその刀、そのライフの名だ。」

『ライフの…名前…？』

「ああ。…いくら武器といえども、ライフは個人特有の物だ、それ故にライフには名がついている。…例えば俺のライフの名は幻想ノ

箱《The box of the fantasy

》だ。…能力は…言う必要はなさそうだな。…まあ俺の場合は特殊で、武器の形では無く、一つの小さな箱の形だけだな。」

すると璃庵はコートのポケットから、真つ黒の小さな手のひらサイズの箱を取り出すと、それを爽に見せ、またすぐにポケットにしまった。

「まあこのように武器の形をしない、特殊な形のライフもあるって事だ。覚えておけ。」

『は…はあ…。』

「…そこで、本題だ。…俺のライフに名がある様に、当然お前のライフにも名がある。…自分の武器の名ぐらい知っておきたいだろう？…そのライフの名を告げるのが、俺の本当の役目だ。“ライフを創った”者としてのな。」

『ライフを…創った…？…あんたが…？』

「…まあこの話はまた今度してやる。…さあ、一度しか言わねえから聞き逃すなよ？…お前はそのライフをずっと命として扱ってくんだからよ…。」

『この…刀の名前は…？？』

「…そのライフの名は…桜舞刀《The sword that cherry blossoms flutter

》だ。…その太刀筋は美しく、刀を振るたび、桜の花びらが舞う。

…時にその桜は焰となり、舞い散る焰の桜が周囲を燃え散らす…。」

「…それが…俺のライフ…桜舞刀…」

その後、爽は刀を見つめ、少しフツと笑った。

…何故笑ったのか、それは本人にも分からなかった。

ただ、その名の響きから、爽の体をゾクゾクと湧かせるものがあったのは確かだった。

伍ノ話『The rule book』

……璃庵との話を終えた爽はエシの元へと向かっていた。

（“爽、お前は今からエシの所へ行け。そしてあいつにお前のライフの詳しい使い方を聞かせてもらえ。あいつはお前の調教師だからお前の事なら何でも知ってる”と、思う。…あいに俺は忙しくて詳しい使い方まで教える暇がなくてな…。…多分あいつはこの城を出て、西に数分歩いたところにあるライフ・メーカー達の宿舎に居ると思う。…宿舎は数棟あって、そこには一棟10人程のライフ・メーカーが住んでいるんだ。…あ、勿論そこにはお前とエシの部屋もあるからな。…ちなみにお前らの部屋番号は、参号棟の310号室だ。…じゃあ行ってこいっ！”）

『…って言われたけど…西ってどっちだよっ！』

爽は闇の中、方角が分からず道に迷い、立ち止まっていた。

『はあ…やっぱアイツと住むんだよなあ…。』

その時爽の脳裏にエシの顔が浮かんだ。

『…いや…でも、一応…女と共同生活だろ…？ちょっと…イイかも…？』

爽は少しニヤけたあとにまた闇に向かって歩き出した。

「場面は変わり……宿舎、参号棟309号室……。」

「……遥瞳爽……、短髪で髪は銀髪でくせ毛……の17歳……。同い年……かなる程……もう新入りの情報が出回っているのか……。」

電気を消した薄暗い部屋の中で、黒縁メガネをした優しい顔つきの長髪の男が、一冊の本を見つめ、独り言のように呟いた。

「隣の部屋は……。そう……エシさんの部屋だったな……。……その隣の部屋に遥瞳は来るのか……。……たしか、遥瞳のライフは刀……。……あいつのライフ、試して見るか……。」

言い終わると、男は不適な笑みを浮かべ、本を閉じた。するとその瞬間、本は指でつまめるようなサイズに変わり、男はそれを何も無かったかのようにポケットに入れ、部屋を出た。

「……一方その頃、爽は……。」

「ハア……ハア……。……何だあ！？も……もう……30分は歩いてんぞ……。……ハア……。しかもこの坂道……ッ……。……暗闇でわかんねえけど、コレ完全に山……。登ってるよな……。」

爽は道に迷った末、闇の中をさまよい、ある山のような場所にたどり着いていた。

「コレ……大丈夫か……。……ほんとに宿舎に着くのか……？」

「…どうした爽、道にでも迷ったのか？」

と、うなだれていた爽の後ろから、エシの声がした。

『…ッ！？…エシッ！？いつの間につ…！！』

「…最初からここに居たが…？」

『…え？』

爽はすぐに周りを見回したが、宿舎らしきものは見当たらない。

『エシ…宿舎に居たんじゃ…？？』

「ああ、少し用があつてここに来ていたのだが…。…まさかお前は宿舎を目指していたのか？…ここは城の真東に位置する場所だと言うのに…。相当な方向オンチだなお前は…。…いやしかし、まさかこんな所でお前に行くわすとはな。」

『…東…？…俺、宿舎と逆方向に向かって歩いてたのか…！？』

愕然とする爽に、ハツとひとつの疑問が浮かぶ。

『そ、そうだ。…ここは？ここで何してたんだ？』

「…ここは、ライフ・メーカー達の墓だ。…昔死んだ人達のなまあ墓参りみたいなものだ…。…死体は無いがな。…消滅するから…。」

『友達なのか…？』

「いや、……昔の恩人なんだ……。」

『そうか……。』

エシは少し悲しげな表情を浮かべると、スツと帽子で顔を隠した。

『なあエシ、今“昔”ツツて言ったけどよ、お前、一体何歳だよ……？』

「私か……？私は、一応二十歳で死んだが……、此処に来たのは百年以上前かな……。」

『なっ……！？バツ……ババアじゃねえかつ……！』

「……バツ……？……ババアツ……？」

エシは、驚きの表情を浮かべると、

「もう……絶対……部屋にいれないからなっ……！！」

と、一言爽に言い放って、闇の中へ走り去っていった。

『……やべ……怒った……よな？……とりあえず追いかけてねーと……』

そして爽もエシを追い、闇の中へ走り出した。

(あいつ追いかけてたら多分宿舎に着くはず……！)

…その時だった。

「待て…、お前、遙瞳だな…？…銀髪…間違いないよな…。」

爽は闇の中、黒縁メガネの男に右肩を掴まれ、立ち止まった。

『なっ…何だお前っ？…誰かしらねえけど、離せよ！』

爽は左手で肩を掴まれた手を振り払おうとしたが、振り払おうとしたその手をさらに掴まれ、背中に腕をひねられて身動きがとれなくなった。

『何なんだよ…ッ！？お前っ！』

「俺は…、ライト…。…250人目のライフ・メーカー、希瀬輝^{きせらいつと}だ。…今から少し、お前を試さしてもらう。」

『…250人目のライフ・メーカー！？…試すって…何をだよ！？』

「…お前のライフを…いや、精神力、思考力、体力、全てを試す…。…つまりこうゆう事だ！“The rule book!”」

ライトがそう言い放った瞬間、ライトのポケットから急に辞書のような大きな本が出現し、同時に真っ黒のペンのような物も出現した。

『何だ…？…それは…ライフなのか…？』

「そうだ。これが俺のライフ、The rule bookだ。」

『そのライフで、何をする気だ…？』

「まあ黙ってるって…。俺はお前を試すだけ。ただ、お前に“ルールを植え付ける”だけだ。」

『ルールを……植え付ける…?』

「説明するより、その身に受けた方が早そうだな。…刻め、The rule book!!」

ライトは出現した本に、同じく出現したペンで、何かを書き込み、そしてそのページをちぎり、それを爽の胸に強く押し当てた。

『なっ…何だよ…?…何すんだよ!?!』

「黙ってな…。」

ライトが言ったその時だった。さっき爽に当てた本のページが、薄透明になったかと思うと、ゆっくりと爽の体の中に入っていった。

『…何だ…!?!…コレツ!?!何した!?!』

「…俺の能力が発動しただけだ。…今、お前には3つのルールを植え付けた。一つ目は今から百歩までしか歩いてはいけない。ルールを破れば、“死ぬ”。2つ目は、30分以内に宿舎に行かなくてはならない。宿舎にたどり着けない場合、“死ぬ”。3つ目は、お前は“ゲーム中”、俺以外の人間からは“見えなくなる”。…それだけだ。」

『な…何、言ってるんだ…?…死ぬ…?』

「ああ、死ぬ。…これはいわばゲームだ！…俺のライフの能力は、対象に、本に書いた3つまでのルールを植え付け、そのルール通りに対象を俺の“ゲーム空間”に引き入れる。ルールが守れなかったり、無理矢理破ろうとすればゲームのルール違反によるペナルティ、“死”が待つ。それが俺の能力、The rule bookだ。…ほら、もうゲームは始まっているぞ…？…30分以内に宿舎に行かないと死んでしまうんだぞ？」

『ッ！！…お前…ッ！！頭イカれてんじゃねえかつ！？…ここから宿舎までは、走ればギリギリ30分に間に合うかもしれない…。でも、それを百歩で行けつて…ッ！！どう考えても無理じゃねえか！…まず、何の理由があつてこんな事…ッ！』

「うるさいなあ…。…だから遙瞳…、お前を“試す”だけの為にきたんだよ。…まあ頑^ギギリギリまで足掻けよ。…設定は“easyモード”にしておいたからな。これで生き残れないようじゃ、お前はライフ・メーカーにむいてなかったって事だ。…一度死んだ命だろう？…それじゃあな。」

言つとライトは闇の中へ消えていった。

『……嘘…だろ…？…どうしろつてんだよ……。』

(百歩…30分…“見えない”…？…助けが呼べないっていう事か…？)

『くそ…ッ！時間が…ねえ…ッ！』

残り時間、28分25秒…、残り歩数100歩

残り時間25分 - -。残り歩数100歩 -。

爽は義務教育も受けていない、“バカ”なりの小さな脳をフル回転させて、百歩以内で宿舎へ行く方法を考えていた。…が、全くその方法が浮かばないまま、ゲーム開始から早くも五分を過ぎようとしていた。

『…ヤベエ…。時間が…。』

…“見えない”ということは、人を呼んで、自らは一步も歩かず、人に運んでもらうことが出来ないということ…？…いや、元々こんな闇の中で人なんか見つけられるはずもない。

…ならば何の為に爽を他の人間から見えなくしたのだろうか？

『…今、俺が誰にも見えねえんだったら、バイクとかあったら簡単にパクって宿舎まで行ける…よな…？…そうゆう事なのか…？何か、周りに乗り物は…。』

爽は辺りを見回したが、乗り物どころか建物すらもなく、見えるのは闇ばかりだ。

『やっぱ…何も無えよな…。』

迂闊に動けば歩数を使ってしまふ為、爽がその場で立ち往生し、必死に策を考えていた時の事だった。

闇に覆われた…空(?)の方から、

《ゲアアアツ…!!ゲアアツ…!!》

と、鼓膜を突き破るような、何かの生物の鳴き声でした。

『なっ…なんだ…?』

空が闇で覆われている為、最初、その姿は確認出来なかったが、その生物が空からゆっくりと現れ、姿を現したとき、爽はその生物の正体を悟った。

『…鳥…?』

…それも尋常なサイズではない。

闇の中、赤く光る眼球だけでも爽の頭ぐらいはあるだろう。

『何だ…コイツ…ッ!!…でけエ!!』

その姿は鳳凰ような…、はたまた闇に紛れるその黒い体は、巨大なカラスにも似ていた。全長は軽く10メートルを越えているだろう。

『…天変地異でも起こらねえ限り、こんな異常な生物…生まれねえぞ…。』

呆然としている爽に、“バカ”なりの“バカ”な発想が浮かぶ。

『コイツ…捕まえて宿舍まで飛んで行けねえかな…？そしたら歩数も使わないで行けるし…でけエし、恐れけど…。…やって見るか…。百歩以内で…！』

《ゲアツ！！ゲアツ！！》

慣れない構えで刀を構える爽に対して、巨大鳥は威嚇の姿勢をとった。

『覚悟しやがれ…。…ギリギリ飛べるぐらいに、半殺しにしてやるっつ！！』

そう言っつて爽は巨大鳥の顔面に素早く切りかかった。

『1…2…3…おらあつ！！』

出来るだけ歩数を節約するため、少し跳ね気味に近づいての攻撃だったが、巨大鳥はそれをヒラリと躲すと上空に飛び上がり、空を旋回し始めた。

『クソツ…！！やっぱ歩数の事を考えてたら、当たる攻撃も当たんねえ…！』

《ゲアアアアアアツ！！》

そう言っつて爽が刀を構えなおしたその時、巨大鳥が奇声を上げ、空を切るように爽に向かって急降下した。

『来るか…！！』

ヒュンッ！！

巨大鳥は急降下した後、爽の体なんて一瞬で切り裂けそうな巨大で鋭利な爪で爽に襲いかかったが、爽はそれを暗闇の中、たまたま見つけた岩場に隠れ、攻撃をやり過ぎすと、すぐに岩場から飛び出し、岩をえぐり取るうとする巨大鳥の足を強く斬りつけた。

《ゲエアアアアアッ！！》

足を斬りつけられた巨大鳥は、奇声を上げて一瞬フラついたがすぐに持ち直し、大きく羽を広げたかと思うと、再び爽に威嚇の姿勢をとった。

『クソッ！！一撃じゃダメだな……。何度も同じ所を斬り刻むか……。いや、急所を狙う！！。殺さない程度に弱らすには……。あの場所しかない！！』

《ゲアアアッ！！ゲアアッ！！》

『なっ……！？』

爽がもう一度巨大鳥の前で刀を構えると、巨大鳥はその広げた羽を大きく羽ばたかせ風圧を起し、爽の動きを止め、斬られた方の逆の足で爽の体を掴み、捕食しようと嘴へと運んだ。

『……なんてな……。わざと掴まれてやったぜ……。これで、“歩数が節約出来た”……。！！……。お前の頭の近くまで行く歩数が……。俺が狙うのは……。……。てめえのそのバカデカい目玉だっ！』

すると爽は巨大鳥に掴まれたまま、刀を巨大鳥の目玉に向けた。

『…飛べ！』

爽が叫んだ瞬間、刀の刀身の一部が欠け、その部分が桜の花びらに変わり、それが一直線に巨大鳥の目玉に向け飛んでゆき、眼球に突き刺さったと思うと、それが爆ぜ、目玉と共に飛び散った。そしてその数秒後、刀は元に戻った。

《ゲエアアアアアアアツツ！！》

『や…やったか…？』

爽は掴まれていた巨大鳥の足の力が緩み、地面に落ちた。

『…痛っ！』

巨大鳥は悶え、右往左往している。

それを見て爽は、出来るだけ歩数を節約しながら巨大鳥に近づき、首に刀を突きつけた。

『おい、お前！…トドメはささないからちょっと宿舎まで乗せてってくれよ。』

《ゲ…アツ！！ゲアアツ！！》

巨大鳥は少し震えながら足を曲げ、爽に背中を差し出した。

『なあんだ…すげえものわかりがいいじゃねえか。さっきまでの威勢が嘘みたいだな！ま、いいや。…とりあえずこれで宿舎に行ける…！…よっしゃ！飛べ！カラス丸ーっ！（勝手に命名）』

《残り時間15分…。残り歩数34歩…。》

『…にしてもよ…、俺、どうやってこの刀から桜を出したんだ…？…やべえ…あの時何か出せる様な気がしたから適当にやったけど…。』

爽は巨大鳥（カラス丸？）に乗り、宿舎へと移動する中、そんな事を考えていた。

『ま…また出せるかな…？………飛べっ！』

爽は刀を頭上に向け叫んだが、何も起こらなかった。

『…恥ずかしい…。…何も出ないのに叫んだ自分が恥ずかしい…。…他人から見えなくてよかったぜ…。それに今、空だし…って、ん？…あれは…。』

…そんな事をしているうちに爽は、米粒ほどの大きさだが、宿舎が見える位置にまで来ていた。幸い宿舎には電気がついていたので闇の中光り輝き、場所はすぐわかった。

『時間は…、…あと7分っ！…大丈夫だ！…歩数もまだあるっ！いけるっ！…！』

…そして宿舎にもだいぶ近づき、宿舎まであと200メートル程に近づいた時だった。

タアアン!!

巨大鳥の胸を一つの銃弾が貫く。

『……な…っ…!?!?…カラス丸っ!!』

更にその銃弾は驚くことに、分厚い皮を突き破り、正確に巨大鳥の心臓を撃ち抜いていた。

そして飛ぶことのなくなった巨大鳥と共に、爽は地面へと落下する。

『…うっ…うあああ!?!?』

ズシイイイン!!

勢いよく地面に叩きつけられた巨大鳥は、自分の体重でグチャグチャに潰れた。

…しかし爽は、持っていた刀の刀身が全て桜へと変化し、それが爽を包み込み、クッションとなって助かった。

『…助かった…のか…?!?…なんだこの桜…俺が、やったのか…?!?』

爽はその行為を無意識におこなったらしい。おそらくさつき巨大鳥の目を爆破したときもだろう。

『…クソっ、一体誰が…俺を撃った!?!?…俺は人から見えない筈な

のに……。……いや、違う。コイツだ！……俺が見えなくても、この鳥が見えたから撃たれたんだ！……宿舎を襲われると思ったのか？……ちよっとかわいそうだな……。』

爽は桜が戻り、刀身がなおった刀を握ると、ゆっくりと立ち上がり、宿舎を見つめた。

『仕方ねえ……撃った奴は誰かしらねえけど……。とりあえずそいつとライトを殴りに……行くか！』

《残り時間6分……。残り歩数30歩……。宿舎まで200m……。》

漆ノ話『生きてゆく場所』

……爽がこの場所から、できるだけ歩数を節約し、宿舎にたどり着くために考えた事はやはり、空を飛んで行くという単純な考えだった。

『……イメージ……。出来るかわかんねえけど、頭ん中でさっき桜が出た時の事をイメージすれば……。！』

爽はその場で刀を構えると、地面に突き刺した。すると突き刺した場所を中心に、大きな桜の花びらの形の魔法陣のようなものが浮かび上がった。

そして刀を引き抜くと、その魔法陣が浮かび上がり、爽の足元に一つの大きなボード状の桜の花びらが出現した。

『……！？桜が……。！！……これなら……行けるかも……っ！！』

爽がそれに飛び乗ると、その桜は風に乗る、まるで空中を滑空するかのように空中移動を始めた。

しかしそれは非常に低い高度で、滑空と言うにはあまりに低く、どのように飛んでいるのかは謎だったが、そのスピードは時速約30キロと、6分で200メートル先の宿舎にたどり着くには十分すぎる速さだった。

『……あと……五分っ……。！！』

爽が風を切って進む。

いつの間にか宿舎はもう爽の目前まで迫っていた。

『…突っ切る…!!』

爽はうまく桜のボードを操作し、少し高度を浮上させると、身体を低く構え、前屈みになってライトが居ると思われる部屋の窓に突っ込んだ。

《ガシャアアアン!》

大きな音と共に窓ガラスが割れ、爽が部屋の中に転げ落ちる。

桜のボードは窓にぶつかった時に消滅したらしく、何処にも見当たらなかった。

そして、勢いよく窓ガラスにぶつかった爽だったが、奇跡的に怪我ひとつしていなかった。

『…これも…桜が…?』

そんな事を考えている時だった。

「…フン、間に合ったのか?…少し遅い気もするが…まあ一応はゲムクリアとしようか…」

割れた窓ガラスが散乱する部屋で悠々と座るライトが、読んでいた本を閉じ、言った。

それを見た爽はすぐに立ち上がり、ライトの胸ぐらを掴んだ。

『…ッ！テメエ…ッ！』

「うるさいなあ…とりあえずゲームはクリアしたんだからお前はもう自由だ。だからもう帰ってくれないか？お前の実力はもう分かったからさ。」

ライトはそう言うと、爽の手を払いのけ、部屋のドアを開けると、軽く首を振って爽に外に出るよう、うながした。

「さあ、勝手に出て行ってくれ。」

そう言ってライトが先程の読みかけの本に手をかけた時だった。

『…オイ…待てよ…』

爽がライトの肩を掴み、強く握った。

「…何だ？…帰ってくれと言っただろう？」

『…うるせえ。とりあえず一発殴らせろ…。…それで許してやる
っつ！』

その瞬間、ライトは固まった。

普通そんな事を先に言われて、はいどうぞと簡単に殴られる馬鹿がいるだろうか？

それと同時にライトは、この男はどれほどガキのような奴なんだと少し呆れた。

真面目な顔でそんな事を言う爽に対してライトは、

「お前は何を言っているんだ？」

と、少し笑って言った。

『お前っ！！馬鹿にしてんのか！？お前によ、“試す”か何だかしらねえけど、好き勝手ルール決めて他人の命を弄ばれたあげく最後は帰れとか！！こっちは死んでたかもしれねえんだぞ！？』

「うれさいなあ。…何勝手にキレてんだよ。…まったく、お前、全然このゲームの意味を分かってないな。」

『このゲームの…意味…？…それって、どうゆうことだよ？』

「ハア。…馬鹿に付き合うのは疲れるな。…お前は、誰のおかげでライフを使えるようになったと思ってる？…まあ少しだけだったけどな。」

『ライフ…、あの、…桜か！？』

「…そう、あれがお前のライフの能力。…らしい。…俺もよく分からないが、どうやら刀から桜を出現させてそれを様々な用途で使えるようだ。…一つ言っておくが、元々あのゲームは、ライフを使

わないとまず攻略出来ない作りにしてあった。だからお前がライフを使えるようになってなければ確実に死んでいた…。」

『…じゃあお前っ！…やっぱ俺を殺す気で…！！』

「まあそう焦るなって。…こうしてお前は生きてるんだ。ライフもある程度…ってゆうか少し、使えるようになったんだから、結果オライじゃあないか。」

『……………、…じゃあ俺にライフを使う才能？がなかったら死んでたって事か？』

「…あ？お前馬鹿か？…お前がライフを使えるようになったのも俺のおかげだぞ？」

『……………？』

「…お前、何も分かってないな…。ま、そら分からないだろうが…。…お前、途中で巨大鳥・ガルダと戦ったろう？」

『ああ…。…てゆうかアイツ、ガルダって言うのか…。』

「あいつも俺がお前に仕向けて放ったんだ。」

『…どうゆうことだ？』

「…ただ、ガルダに遥瞳爽を攻撃するという単純なルールを植え付けただけだ。…そしてガルダはルールど通りに動き、お前を攻

撃した…。俺達ライフ・メーカーのライフは、“戦闘”によって目覚める事が多いからな。だからガルーダにお前を攻撃させたんだ。」

『じゃあ俺がああ鳥を狙わなくても、結局ああ鳥に襲われてたって事がよー！』

「ああ、そうだ。どうしてもお前には戦ってもらわなければならない。ライフを発動出来るようになる為に。でないとお前はゴール出来なかった。…だろ？…だから俺はガルーダを放ったんだ。」

『…。…でも、確かにライフを発動出来たのはお前のおかげかも知れない。…その戦いの時だったんだ。最初に桜が出たのは…。』

「そうだろう？…それに、俺はお前を殺そうと思って、このゲームをした訳じゃあない。お前にライフを使わせる為にやっただけだ。…通常、ライフ・メーカーが自分のライフの能力を使いこなせるようになるには、いくつかの段階をふんで、少しずつ自分のライフの特徴を知っていき、少しずつその能力を知っていき、少しずつライフを使えるようになっていくんだ。…だが、その教え方をする調教師達は間違ってる。…そんな回りくどい事しなくたっていいんだよ。自分のライフの特徴なんて、すぐ覚える。能力なんて、すぐに分かる。…何せ俺達ライフ・メーカーは、戦闘のプロ…だからな。…だからこうゆう事だ。俺達は戦闘のプロ。…だから、その力は戦闘によって、本能的に目覚めるんだよ。」

『俺達が…戦闘のプロ…？…俺なんて、こないだまで、ただ腐ってただだのバカなのにか？…そんなの信じらんねえ…。』

「…ああ、信じられないだろうな。…俺も最初、信じられなかった。自分の戦いの本能が。…初めての戦いで、頭では戦いを怖がって何も出来ないでいるのに、気づけば、まるで体が覚えているかのよう。…戦いを楽しんでたんだ。…それが怖くて仕方無かった。…最初はな。…だが俺はしばらくして気づいたんだ。…この戦闘の動きは、自分の本能なんだと…。…自分は戦いの為の秘めた才能があったんだと。」

『でもさ…戦いを楽しむって…相手は悪魔なんだろう？…逆に、殺されるかもしれねえんだろ？』

「ああ、そうだ。…だがそれも、“スリル”として、楽しんじまう。…だが俺のように、戦いで能力が目覚める事は、いわば飛び級なんだ。…ライフの使い方方の基礎を習っていないから、ライフの詳しい使い方なんて分からない。戦いでライフが目覚めた者は、頭じゃなく、戦闘の本能でライフを扱わなきゃならない。…この事をお前に伝えたかった。…お前もいずれ目覚めるはずだ。自分の才能にな。」

『…そ、そんな事、何で俺に教えたりなんかするんだ？…お前は一体俺をどうしたいんだよ！？』

「…俺はただ、お前のライフ・メーカーへの道の第一歩の手助けをしたかっただけだ。…何か悪いか？」

『いや…、殺されかけた奴に言うのもなんだけど…、もしかしてお前って、ちよつといい奴なのかな…。…なんて。』

「………そんな事、どうでもいいだろう。」

『…だ、だよな！…でも何かありがとうな。…俺、ライフ・メーカーになる事にまだ、躊躇があったんだよな…。でも、お前が俺にライフを使える様にしてくれた事で、第一歩を踏み出せた訳だし…。…まだ自分が戦闘のプロとか信じられねえけど、あの鳥と戦った時の事思い出したら、やっぱり本能的に動いてたんじゃないかなって思ったりするんだよな…。』

「……………爽。」

『……………ん？』

「…これから先、ライフを完全に使える様になり、お前が悪魔と戦う事になったとする。…だが、決して戦闘中、我を忘れたりするなよ。…本能、その者のライフが強ければ強いほど怒り任せに我を忘れたりすれば、戦闘本能に飲まれる事になるぞ…。…これは俺の経験上の話だ。…戦いの中では、常に冷静を保つんだ。…わかったな？」

『……………お、おう。』

「…あと、一つ言つのを忘れていた。…さっきお前に帰れと言ったが、確かお前の部屋は俺の部屋の隣だったな。」

『……………えっ…？』

「まあお隣さんということでは…よろしく。」

そう言つて、ライトが右手を差し出したが、爽は遠くを見つめて呆

然としていた。

『まさか殺されかけた奴の隣の部屋だったなんて……。』

「だから殺すつもりはなかったって言ってんだろっが……。」

ライトは少し怒り気味に言うと、部屋から爽を追い出した。

『……まだ、分からねえ事いっぱいあるんだよな……俺って……。……こんなんで、ライフ・メーカーなんか、なれんのかなあ……。』

部屋の外で一人、項垂れる爽の前に、一つの影。

「……私が、立派なライフ・メーカーにしてやる……。」

『……エシ……ッ?』

爽の目の前にいたのは、エシだった。

「……さあ、調教を始めるぞ……。私の調教は調教師一、厳しいが……。爽、ついてこれるか??」

『……望むところだ……。みっちり調教してもらっぜ?……エシ。』

(……分からねえ事とか、悪魔が怖いとか……そんなの今はどうでもいい。……あの時……あの絶望の日々には無かった楽しみ……“戦い”が此処にはある……。……元々死んでた様な命だ。……俺は……。……この世界で生きてゆくと決めたんだ。)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0216v/>

?+Life+? ~ ライフ ~

2011年10月9日12時24分発行